

# 今週の T2 経済レポート



2022年9月16日号

## ■■■ 市場ウオッチ ■■■

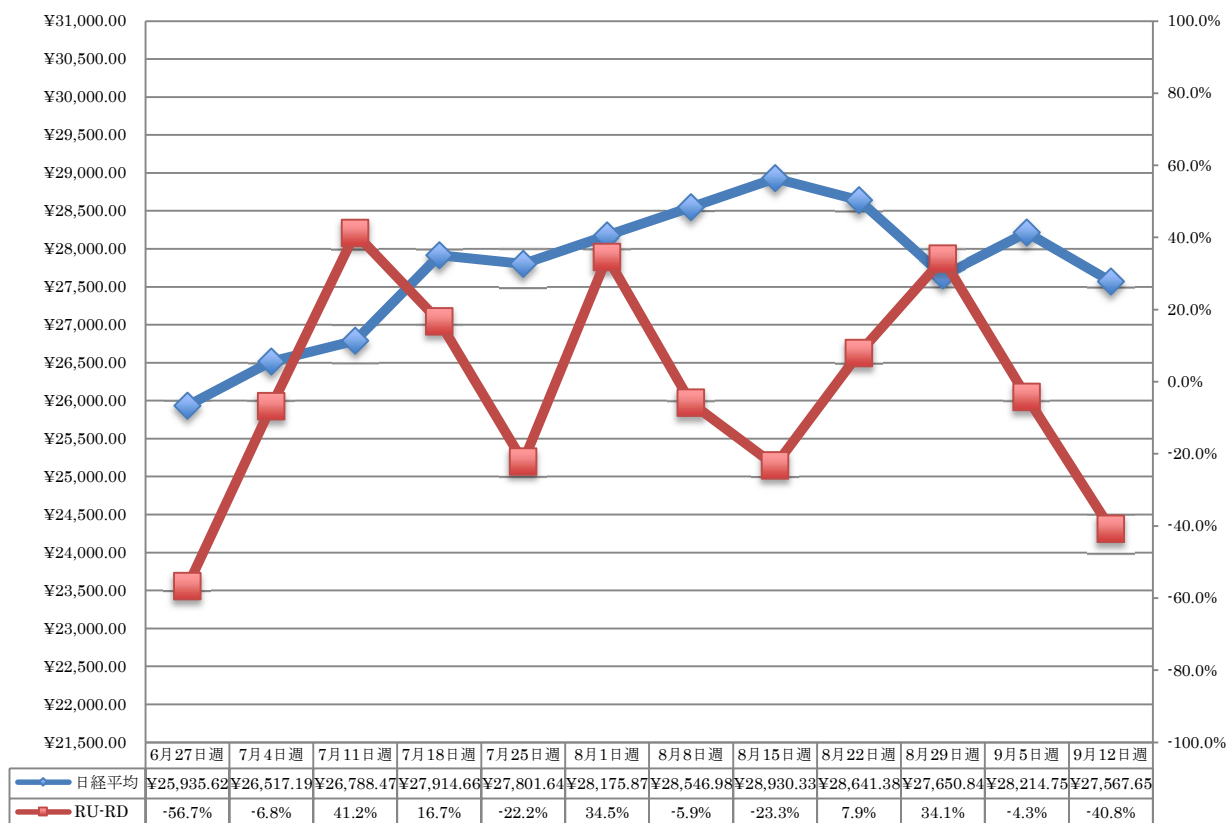
### <先週のマーケットを振り返る>

先週、「今週は本来ですと軟調相場の週となりそうです。今週(9/12~9/16)の相場を占う『RU-RD指標』の9月2日週が-40.8%と、6月13日週以来の下限ゾーンへ急落、かつ7月25日週~8月1日週以来となる2週連続でマイナス圏に陥っているため、軟調相場の週となりそうです。ただ、来週(9/19~9/23)の相場を占う9月9日週が+7.4%と、3週間振りにプラス圏に浮上したため、本来ですと急反発が期待される週となります。先週、『先週末、経済シンポジウム「ジャクソンホール会議」におけるパウエル米連邦準備理事会(FRB)議長の講演を受けた米国市場が急落したことで、来週起きるであろう急落調整が前倒しで今週、発生しそうです。』と指摘した通り、-900円超の急落が起きたことで、今週の急落調整の可能性は小さくなったかもしれません。その場合は来週の下落には注意が必要となりそうです。今週末は日本のメジャーSQ、来週末は米国のメジャーSQを迎えることで「株価操縦」がより激しくなることに加え、9月5日は毎年9月第1月曜日の「レーバーデー」で、日本で言えば4月新学期のようなもので市場参加者が心機一転のタイミングとなることから市場では大きな変化が表れやすい9月となります。08年のリーマンショックや1929年の「暗黒の木曜日」の大暴落もレーバーデー明けの火曜日が転換点となったことはその代表例です。』と指摘しましたが、日本のメジャーSQのためにも「相場操縦」か、下値目標値まで下落後、週末には上値目標値まで急反発する乱高下の激しい週となりました。今週末も米国のメジャーSQを控えることから先週の日本市場と同様、「株価操縦」が激しくなるかもしれませんが、逆に言えば、下落すべき局面で株価を吊り上げるこのような「相場操縦」はその反動が起きやすいかたちとなっていることに注意が必要です。一方、『日経平均とのほぼ一致指標である「買い(レーティング1と2)」「売り(レーティング3と4)」銘柄比率』が22年8月5日週-14.3%→8月12日週-10.0%→8月19日週+11.4%→8月26日週+7.1%→9月2日週-21.4%→9月9日週-30.0%と、2週連続でマイナス圏に陥っています。いつも指摘していますが、過去、下落相場が終了するには、同指標の移動平均ベースが一旦、「-40%の下限ゾーン」に陥ることが条件です。同指標の移動平均は22年8月5日週-8.6%→8月12日週-7.1%→8月19日週-3.8%→8月26日週-1.2%→9月2日週-4.8%→9月9日

週-9.5%と、18 週連続マイナス圏に陥ってます。ただ、不自然な「株価操縦」を繰り返すことで「-40%の下限ゾーン」を未だ実現せず、そのため「株価底入れ」が遠のいているのが現状です。以前から、『今年はショートカバー(売り方の買い戻し)で相場が急反発する「ブルトラップ(強気のワナ)」を繰り返していることも特徴』と指摘してきましたが、リーマン・ショックの「世紀の空売り」のモデルとなったマイケルバーリ氏も『2000 年の IT バブル崩壊でナスダックはピークから底値まで 78%下落する過程で、+10%以上の反転上昇は 16 回、+20%以上は 7 回あった』と指摘しています。先週、NY ダウは 833ドル高の大幅反発となりましたが、ここ 3 週間で NY ダウが約 2500ドル弱の急落後の「ブルトラップ(強気のワナ)」と思われます。先週指摘したように、NY ダウの T2 レーティングがリバウンドを示唆するかのように 7 月 1 日週に「買い」転換した後、9 月 2 日週には「売り」転換しており、マイケルバーリ氏が云う「デットキャットバウンス」終了のサインが表れたかたちです。

今週は、経済指標では、国内は、9 月 12 日に 8 月工作機械受注、13 日に 7-9 月期法人企業景気予測調査、8 月企業物価指数、14 日に 7 月機械受注、15 日に 8 月貿易収支、一方海外で、13 日に米 8 月 CPI、14 日に米 8 月生産者物価指数(PPI)、15 日に米 9 月 NY 連銀景況指数、米 9 月フィラデルフィア連銀製造業景況指数、米 8 月小売売上高、米 8 月鉱工業生産、16 日に欧 8 月ユーロ圏 CPI、中国 8 月小売売上高、中国 8 月鉱工業生産、米 9 月ミシガン大学消費者信頼感指数などが発表予定です。9 月 13 日発表の米 8 月消費者物価コア指数(CPI)は前年比+6.1%と、7 月実績前年比+5.9%を上回る可能性があります。市場予想と一致した場合、大幅追加利上げを織り込む材料となりそうです。9 月 15 日の米 8 月小売売上高は金利引き上げの影響や消費者信頼感は伸び悩んでいることから前月比+0.0%にとどまる見通しです。このほかのイベント・トピックスとしては、12 日に中・株式市場は祝日のため休場(中秋節)、香港・株式市場は祝日のため休場(中秋節の翌々日)です。」とコメントしました。

### RU-RD指標と日経平均（週末終値）



8月22日週	8月29日週	9月5日週	9月12日週
¥28,641.38	¥27,650.84	¥28,214.75	¥27,567.65
7.9%	34.1%	-4.3%	-40.8%

先週の日経平均は、高値 28659 円(9月13日)・安値 27525 円(9月16日)と推移、前の週と異なり、前半高・後半安の弱いかたち。先週は、週初、前の週末の米株式市場で長期金利の上昇が一服し、ナスダック総合指数が大幅に上昇した流れを引き継いで 28500 円台を回復、上値目標値を超えてスタートしましたが、米連邦準備制度理事会(FRB)が重視する食品・エネルギーを除いたコア指数を中心に米 8 月 CPI が予想を大幅に上振れたことで金融引き締め強化に対する警戒感が再燃、米国株市場では NY ダウが 1200 ドル超の急落となり日経平均も先物主導の売りで一時 800 円超下落、さらに週末 16 日は米 10 年債利回りが 6 月来の高水準まで急伸したことに加え、3 連休を控えたポジション調整の売りも重なり 27500 円手前まで下落、週間ベースでは-647 円安と、メジャーSQ のため不自然に上昇した先週の上昇分+564 円高を帳消しにして終了しています(先週予告していた上値メド 27749 円~28303 円(+2%かい離)//下値メド 27160 円~26616 円(-2%かい離))。『大台替えと時間の物理学的法則』では、小刻みの大台替えで、9月14日に 28000 円大台割れで下落スタートとなりました。27500 円大台割れでカウントダウンの下落局面、逆に、28500 円

大台替えで仕切り直しが入ります。中期の方向を示す月ベースでは、8月29日に28000円大台割れで下落スタートとなりました。27000円大台割れでカウントダウンの下落局面、逆に、29000円大台替えで仕切り直しが入ります。また長期の方向を示す月ベースの大台替えの法則では、8月に28000円大台割れで下落スタートとなりました。27000円大台割れでカウントダウンの下落局面、逆に、29000円大台替えで仕切り直しが入ります。これで短期↓、中期↓、長期↓となり、中期・長期の弱含みは変わりませんが、短期が再度、弱含みとなりすべてが弱含みとなったことで下落しやすいかたちに変化しました。「8日に節目を割り下落しやすいかたちになった途端、次の日に節目を超えさせて強含みにする、まさにこれこそ「相場操縦」です。メジャーSQのためとはいえ、そろそろこんな茶番劇は取り締まらなければなりません。」と指摘しましたが、今回の急落はメジャーSQのための「相場操縦」であることを改めて証明したかたちです。

日経平均を左右するNYダウは、高値32504ドル(9月12日)・安値30550ドル(9月16日)と推移、前の週と異なり、前半高・後半安の弱いかたち。先週は、週初、長期金利の上昇が一服し、ナスダック総合指数が大幅に上昇した前の週の流れを引き継いで上値目標値を超えてスタートしましたが、13日に発表された米8月消費者物価指数(CPI)が予想を上回る高い伸びとなりFOMC会合で政策金利が1.00%引き上げられるとの観測が浮上、13日のNYダウは1200ドル超の急落で率・幅ともに今年最大の下げを記録、また週末16日に発表された9月ミシガン大消費者信頼感指数速報値は59.5と市場予想の60.0を下回る弱い結果、さらに8月小売売上高など米国の経済指標が冴えなかったほか、世界銀行が2023年の世界の景気後退リスクに言及したことも売りに拍車をかけ下値目標値目前まで急落、週間ベースでは-1329ドルと、前の週の4週間ぶりの不自然な大幅上昇分+833ドル高をすべて打ち消す急落で、週間ではダウ平均が4.13%安、S&P500が4.77%安、ナスダック総合が5.48%安とそろって大幅反落し、S&P500とナスダック総合は6月中旬以来の下落率を記録したほか、5週間で4週下落したここ5週間でNYダウは-2939ドル安と、3000ドル近い大幅安となっています(先週予告していた上値メド31658ドル~32291ドル(+2%かい離)//下値メド30483ドル~29873ドル(-2%かい離))。「大台替えの法則」では、短期の大台替えで、9月13日に32000ドル大台割れで下落スタート、同時に、31500ドル大台割れでカウントダウンの下落局面入りに0日間、猶予で14日までに31000ドル大台割れでカウントダウン継続に1日間、従って、15日までに30500ドル大台割れでカウントダウン継続を狙う時間帯に入りましたが、実現せず時間切れ。31500ドル大台替えで仕切り直し、逆に、30000ドル大台割れで下落スタートとなります。中期の方向を示す月ベースでは、8月23日に逆に、33000ドル大台割れで下落スタート、29日に32000ドル大台割れでカウントダウンの下落局面入りに6日間、従って、9月4日(日曜日のため3連休明け6日)までに31000ドル大台割れでカウントダウン継続を狙う時間帯に入りましたが実現せず時間切れ。33000ドル大台替えで仕切り直し、逆に、30000ドル大台割れで下落スタートとなります。長期の方向を示す月ベースでは、逆に8月、33000ドル大台割れで下落スタート、同月32000ドル大台割れでカウントダウンの下落局面入りに0ヶ月、従って、8月までに31000ドル大台

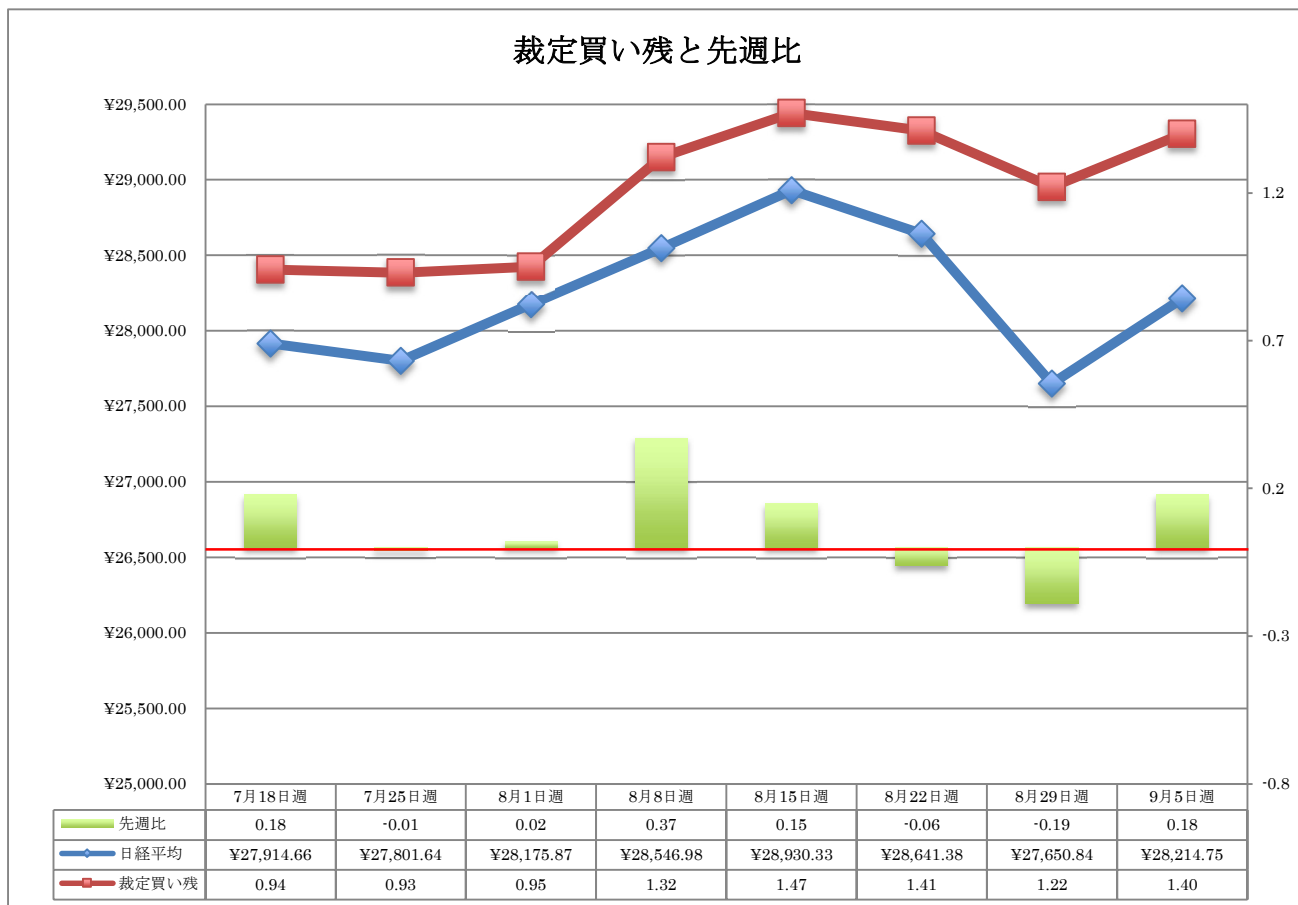
割れでカウントダウン継続を狙う時間帯に入りましたが実現せず時間切れ。33000 ドル大台替えて仕切り直し、30000 ドル大台割れで下落スタートとなります。これで短期→、中期→、長期→となり、中期・長期の方向感がないなか、短期も再び、方向感がなくなり、中長期だけでなく、目先も乱高下しやすいかたちに変化しました。本格的に上昇するには、中期・長期が強含みに変化する33000ドル大台替え、逆に、本格的に下落するには、中期・長期が弱含みに変化する30000ドル大台割れ、がそれぞれ重要な節目で、それを実現するまでは目先、株価を「相場操縦」して乱高下で稼ぐ可能性が高そうです。

一方、為替は、ドル・円が144.95円～141.66円(先週予告していた上値メド145.08円～146.53円(+1%かい離)//下値メド142.36円～140.93円(-1%かい離))と推移、下値目標値を達成し、3週間振りに円高・ドル安、ドル・ユーロは、1.0197～0.9940(先週予告していた上値メド1.0075～1.0175(+1%かい離)//下値メド0.9894～0.9795(-1%かい離))と推移し、上値目標値を上回り、3週連続でドル安・ユーロ高。また、ユーロ円は、145.62円～142.25円(先週予告していた上値メド144.40円～145.84円(+1%かい離)//下値メド141.12円～139.70円(-1%かい離))と推移し、上値目標値を達成し、3週連続で円安・ユーロ高。前の週のユーロ>ドル>円からユーロ>円>ドルへ変化しましたが、ユーロ高は3週連続で継続したかたちです。欧州中央銀行(ECB)のデギンドス副総裁などが追加利上げの可能性を示唆したことからユーロ買いが先行しましたが、米8月消費者物価指数(CPI)が予想を上回ったことで米長期金利が上昇、一時、リスク回避的なユーロ売り・ドル買いが活発したものの、ECBによる大幅利上げ観測は後退せず、米ドル買いは一巡したかたちです。

## <裁定買い残・裁定売り残>

3週間振りに増加。2週間で2357億円減少した後、1795億円増加させて、21年9月20日以来の1兆4000億円超まで再度、膨らませています。21年以降、3月と9月の年度末に不自然な裁定買いで年度末の株価を吊り上げる「株価操縦」を繰り返してありますが、裁定買い残の水準は21年以降のピーク水準に達したかたちです。「今回は過去3回の株価操縦局面と異なるのは3月や9月の年度末ではなく、1ヶ月早く行われており、年度末9月に向けてどのような操作をするかが注目されます。」と指摘しましたが、1ヶ月間、高値圏で乱高下させて時間を稼いでいる感じです。一方、「裁定売り残」は、前の週比-676億円の1893億円と、3週連続の減少。3週間で-2046億円と、8月15日週の1週だけ僅か+30億円増えたことを除くと、7月11日週～8月8日週までの5週連続で合計2539億円減少したのを含め実質8週連続減少しています。つまり、「裁定売り残」も利用して日経平均の上昇を演出していたかたちです。実は、その5週連続減少の前は、逆に、4週連続増加で、合計3096億円の増加をさせて日経平均の下落を演出していました。「裁定買い残」の推移を振り返ると、18年9月14日週～28日週の3週間合計で+1.12兆円の急増となり、18年5月21日週以来、約4ヶ月振りに2兆5000億円台を回復して18年10月2日の日経平均の年初来高

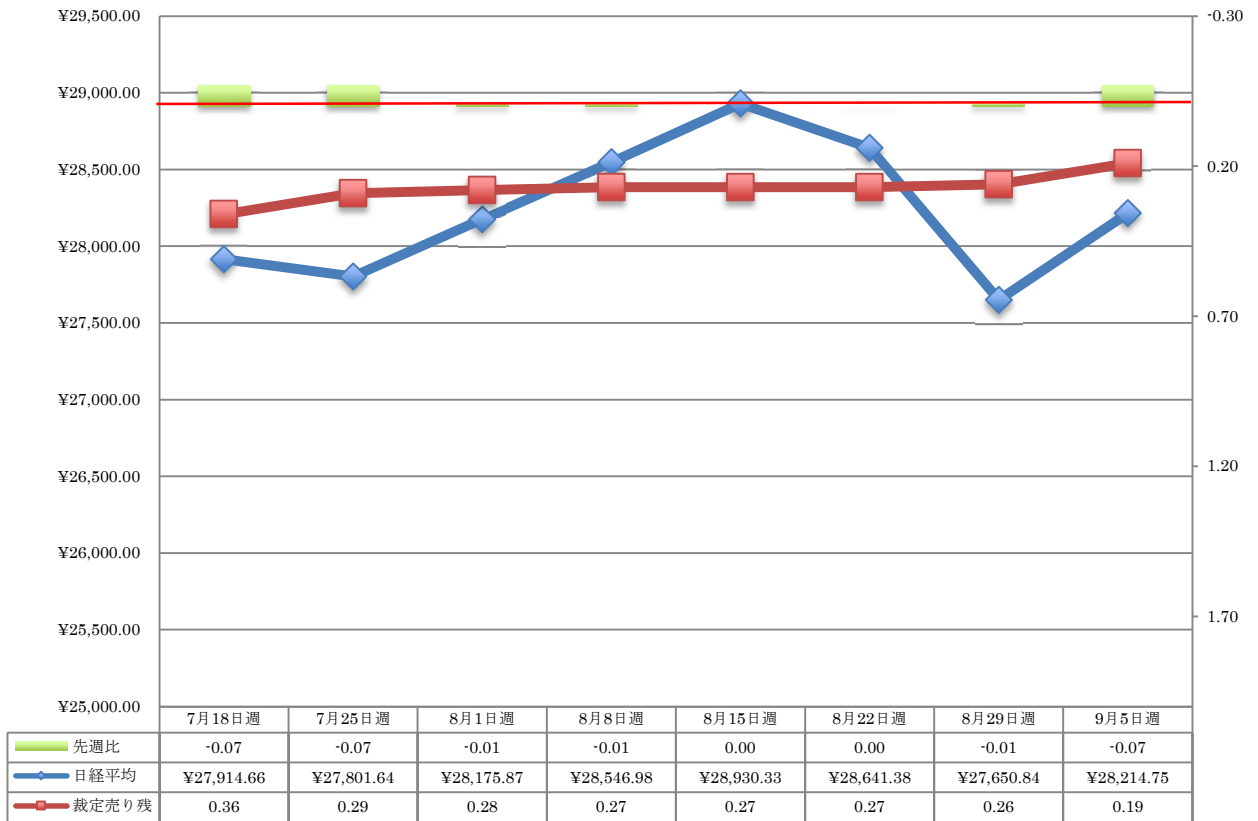
値更新を演出。その後、18年10月1日週～10月26日週の4週連続減少、4週間合計で約1.5兆円急減、この4週間のうち1週間は5000億円と18年2月5日週以来の急減で、やはり18年10月からの暴落は「VIX ショック」と同様、投機筋の外国人の売り仕掛けだったことを証明しています。



8月15日週	8月22日週	8月29日週	9月5日週
¥28,930.33	¥28,641.38	¥27,650.84	¥28,214.75
1.47	1.41	1.22	1.40
0.15	-0.06	-0.19	0.18

単位:兆円

### 裁定売り残と先週比



8月15日週	8月22日週	8月29日週	9月5日週
¥28,930.33	¥28,641.38	¥27,650.84	¥28,214.75
0.27	0.27	0.26	0.19
0.00	0.00	-0.01	-0.07

単位:兆円

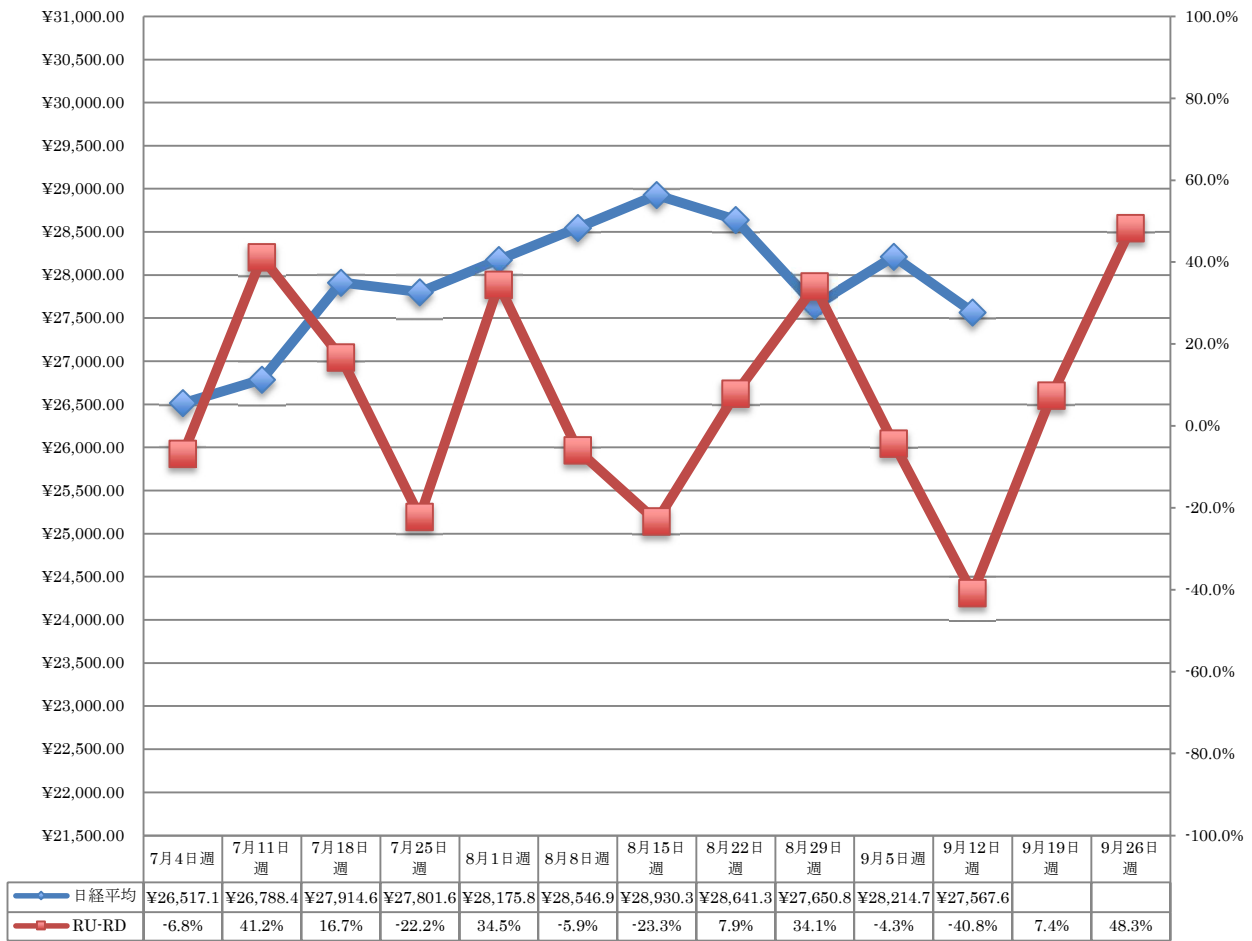
## <今週のマーケットの見通し>

今週は本来ですと急反発が期待される週となりそうです。今週(9/19~9/23)の相場を占う『RU-RD指標』の9月9日週が+7.4%と、3週間振りにプラス圏に浮上したため、本来ですと急反発が期待される週となります。さらに、来週(9/26~9/30)の相場を占う9月16日週が+48.3%と、2週連続でプラス圏、かつ6月27日週以来となる上限ゾーンへの一気の浮上で、本来ですと堅調相場の週となります。先週、『日本のメジャーSQのための「相場操縦」か、下値目標値まで下落後、週末には上値目標値まで急反発する乱高下の激しい週となりました。今週末も米国のメジャーSQを控えることから先週の日本市場と同様、「株価操縦」が激しくなるかもしれませんが、逆に言えば、下落すべき局面で株価を吊り上げるこのような「相場操縦」はその反動が起きやすいかたちとなっていることに注意が必要です。』と指摘しましたが、日経平均、NYダウはともに上値目標値を上回る水準からスタートしたものの、高値から安値までの一週間の下落幅は日経平均が-1134円安、NYダウが-1954ドル安と、予告した「相場操縦」の反動が起きたかたちです。今週はFOMC(9/20~21)、日銀金融政策決定会合(9/21~22)、英国金融政策発表(9/22)など、中央銀行イベントが目白押しで様子見ムードが支配的となるかもしれませんが、仮に、そのような場合は来週に急反発がずれ込む可能性があります。ただ、急反発が起きたとしてもそれは「底入れ」サインと勘違いしないことが重要かと思われます。一方、『日経平均とのほぼ一致指標である「買い(レーティング1と2)」「売り(レーティング3と4)」銘柄比率』が22年8月5日週-14.3%→8月12日週-10.0%→8月19日週+11.4%→8月26日週+7.1%→9月2日週-21.4%→9月9日週-30.0%→9月16日週-11.4%と、3週連続でマイナス圏に陥っていますが、再び、マイナス幅は縮小しています。いつも指摘していますが、過去、下落相場が終了するには、同指標の移動平均ベースが一旦、「-40%の下限ゾーン」に陥ることが条件です。同指標の移動平均は22年8月5日週-8.6%→8月12日週-7.1%→8月19日週-3.8%→8月26日週-1.2%→9月2日週-4.8%→9月9日週-9.5%→9月16日週-9.0%と、19週連続マイナス圏に陥ってます。ただ、不自然な「株価操縦」を繰り返すことで「-40%の下限ゾーン」を未だ実現せず、そのため「株価底入れ」が遠のいているのが現状です。以前から、『今年はショートカバー(売り方の買い戻し)で相場が急反発する「ブルトラップ(強気のワナ)」を繰り返していることも特徴』と指摘してきましたが、リーマン・ショックの「世紀の空売り」のモデルとなったマイケルバーリ氏も『2000年のITバブル崩壊でナスダックはピークから底値まで78%下落する過程で、+10%以上の反転上昇は16回、+20%以上は7回あった』と指摘しています。NYダウの「T2レーティング」がリバウンドを示唆するかのように7月1日週に一旦、「買い」転換しましたが、約2か月後の9月2日週に再び「売り」転換して、マイケルバーリ氏が云う「デットキャットパウンス」終了のサインが表れたかたちです。先週13日にNYダウが1200ドル超の急落で率・幅ともに今年最大の下げを記録したことはそれを証明したかたちです。



今週は、経済指標では、国内は、9月20日に8月全国消費者物価指数、21日に8月訪日外国人客数、一方海外で、19日に米9月NAHB住宅市場指数、20日に米国8月住宅着工件数、21日に米国8月中古住宅販売件数、22日に米国4-6月期経常収支、8月コンファレンス・ボード景気先行指数、23日に米国9月製造業購買担当者景気指数(PMI)、米9月サービス部門PMIなどが予定されています。20日発表の日本8月消費者物価コア指数(コアCPI)予想はエネルギー、食料品以外の項目でも上昇が続いていることから前年比+2.7%と、参考となる7月実績同+2.4%を上回り、上昇率は消費税率引き上げの影響を除くと2008年8月以来の水準となりそうです。このほかのイベント・トピックスとしては、国内は、19日敬老の日、23日に秋分の日のシルバーウークの谷間に当たり20-22日の3日間の取引、19日に岸田首相が渡米し、国連総会出席、NY証券取引所などでスピーチを行う予定、21日に日銀金融政策決定会合(~22日)、22日に黒田日銀総裁会見、海外は、20日に米FOMC(~21日)、21日にパウエルFRB議長会見、22日に英金融政策委員会が予定されています。今週は「中銀ウィーク」ですが、9月20日-21日開催のFOMCは直近発表の8月消費者物価コア指数(CPI)が前年比6%超の高い伸びを記録したことで、CMEのFedWatchによると、9月15日時点で9月開催のFOMC会合でFF金利の誘導目標水準が3.00-3.25%以上となる確率は100%から、3会合連続での0.75%の利上げがほぼ確実視されています。また、同時に発表されるFOMCメンバーの年末のFF金利見通しや経済見通し、パウエルFRB議長の記者会見での発言に注目が集まっています。また日銀は21-22日開催の金融政策決定会合で現行の緩和的な金融政策を維持する公算ですが、足元のドル円相場が24年ぶりの円安水準で推移しており、日銀が円安進行について強い懸念を伝えた場合、リスク回避的なドル売り・円買いが強まる可能性があります。

### RU-RD指標と日経平均（週末終値）



9月5日週	9月12日週	9月19日週	9月26日週
¥28,214.75	¥27,567.65		
-4.30%	-40.80%	7.40%	48.30%

## ■■■ 今週の各指標の上値・下値メモ ■■■

<日経平均>

上値メモ 28453 円～29022 円 (+2%かい離)

下値メモ 27604 円～27051 円 (-2%かい離)

<NY ダウ>

上値メモ 32036 ドル～32676 ドル (+2%かい離)

下値メモ 30883 ドル～30265 ドル (-2%かい離)

<ドル円>

上値メモ 147.16 円～148.63 円 (+1%かい離)

下値メモ 142.90 円～141.47 円 (-1%かい離)

<ドルユーロ>

上値メモ 1.0172～1.0273 (+1%かい離)

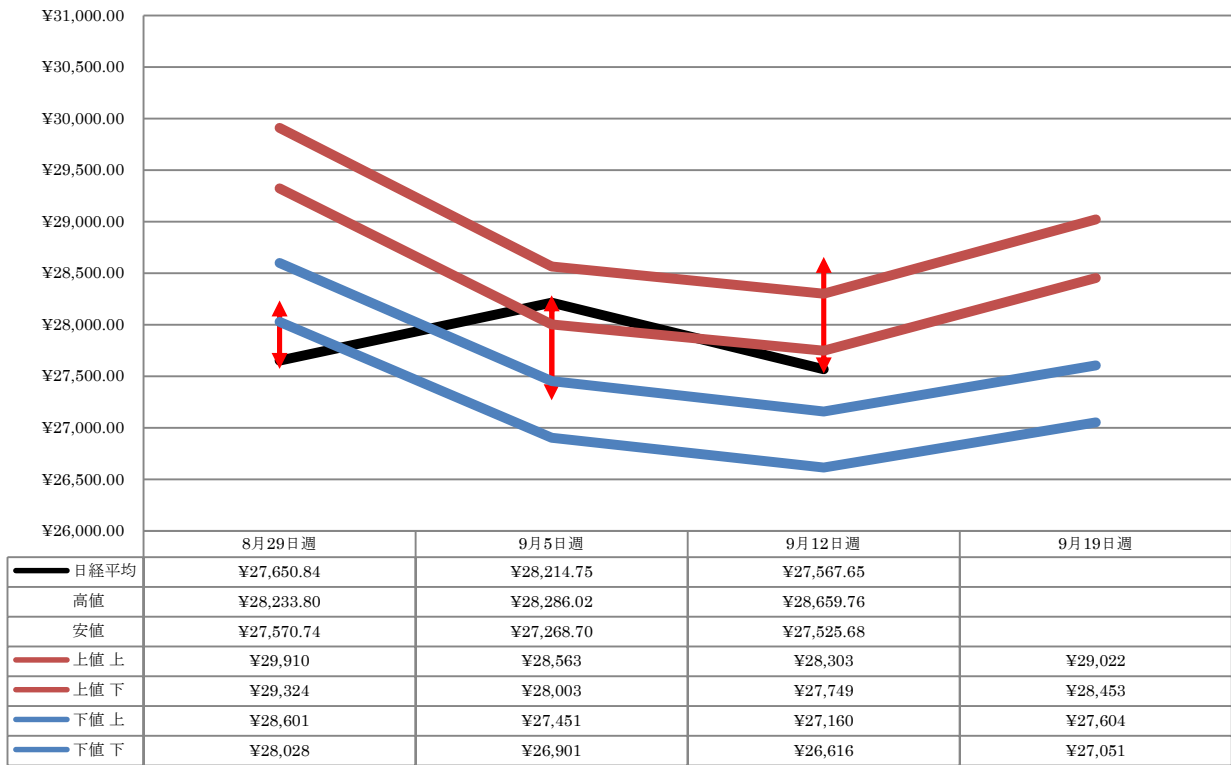
下値メモ 0.9958～0.9858 (-1%かい離)

<ユーロ円>

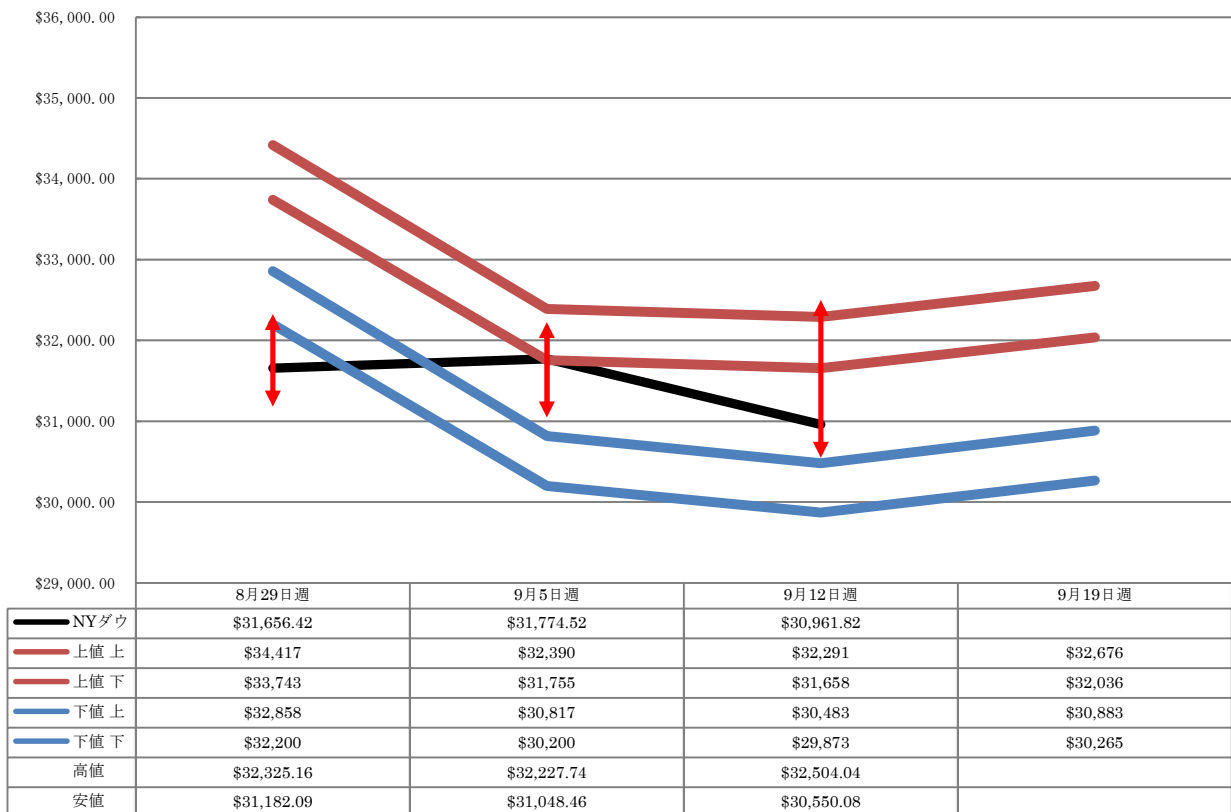
上値メモ 147.95 円～149.42 円 (+1%かい離)

下値メモ 142.84 円～141.41 円 (-1%かい離)

### 日経平均



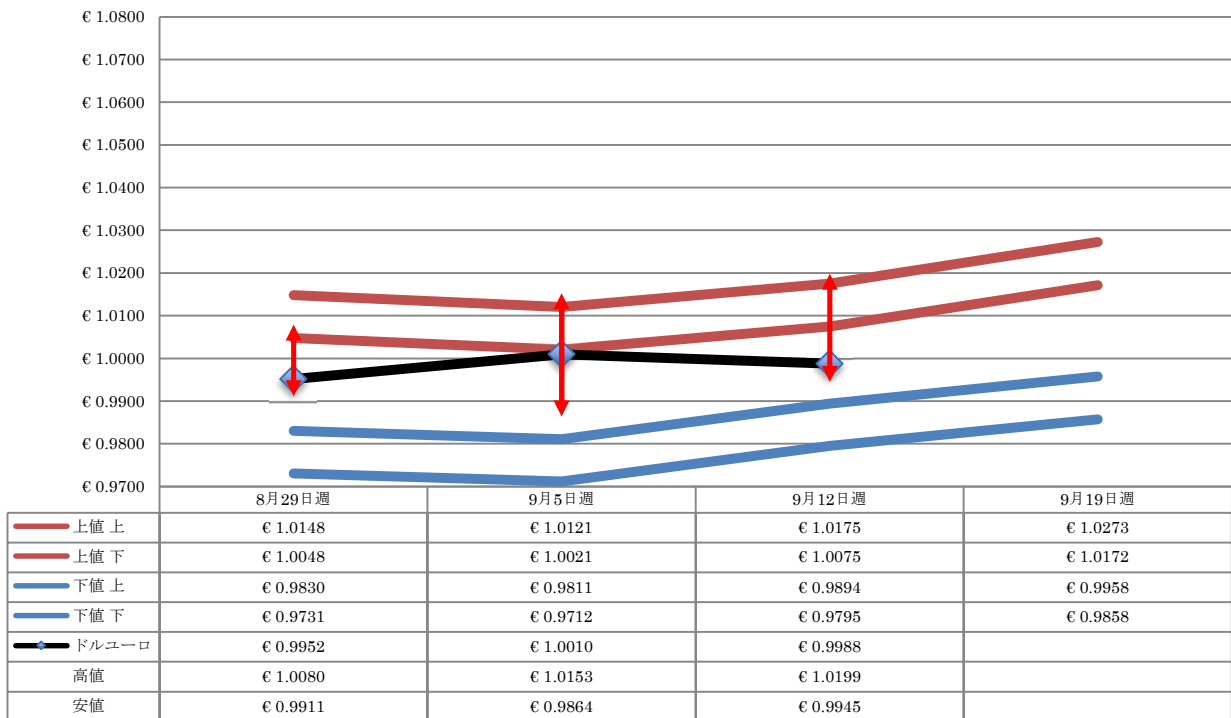
### NYダウ

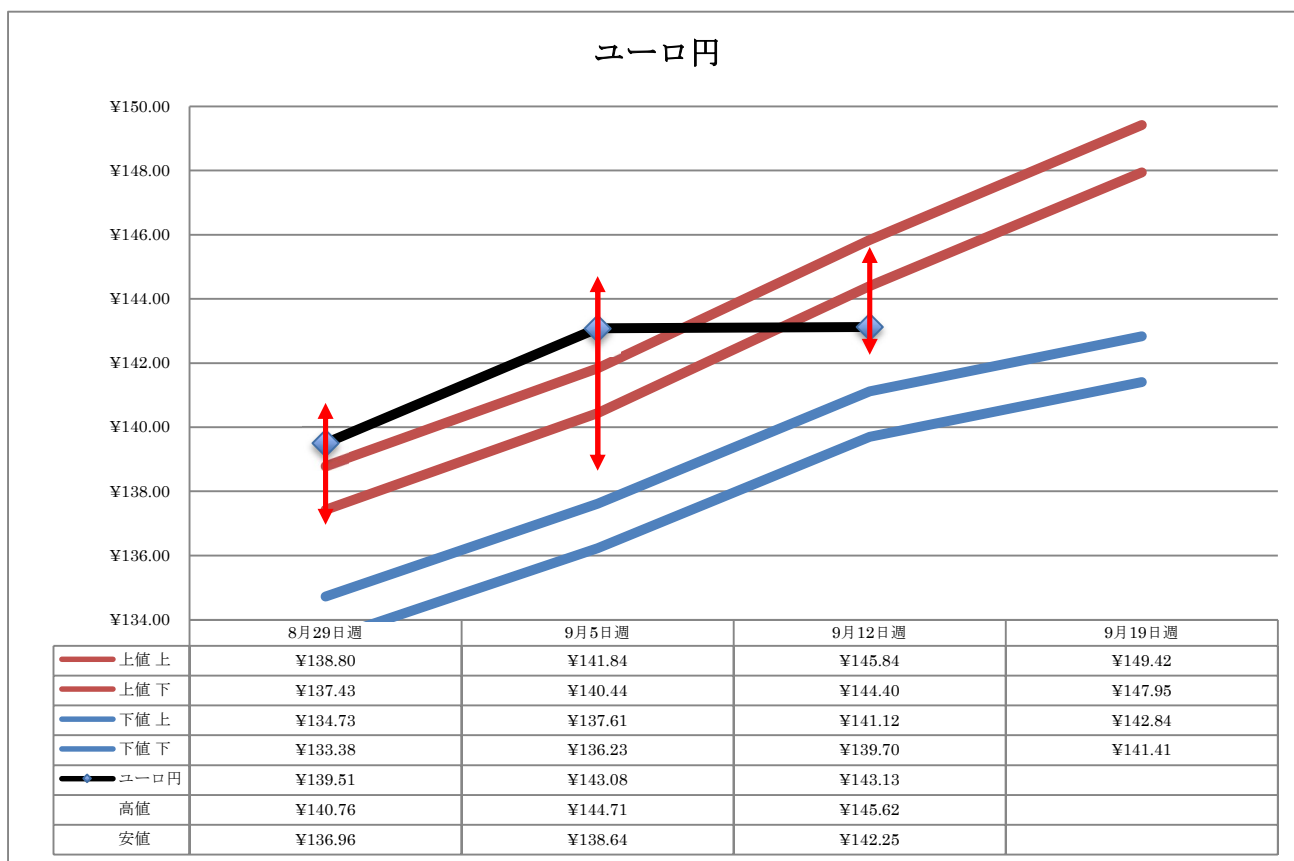


## ドル円



## ドルユーロ

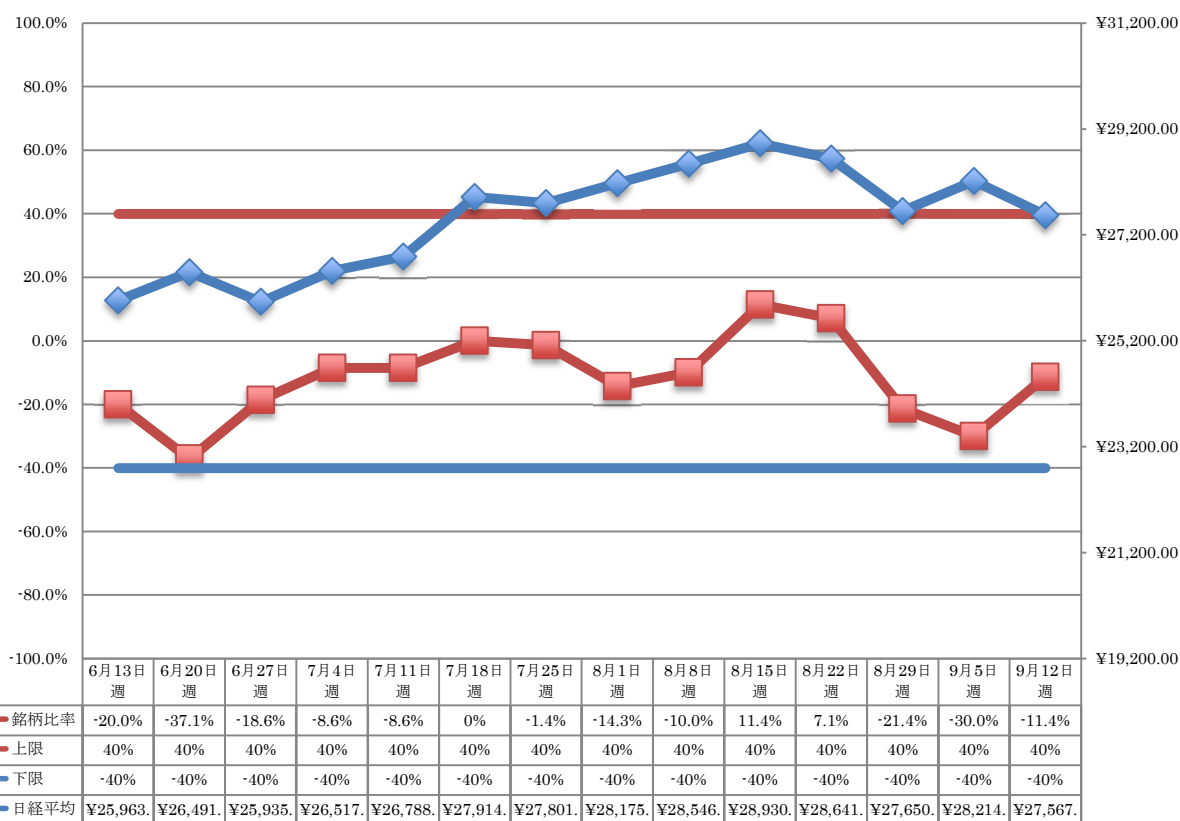




### ■■■ レーティング変更 ■■■

同指標は日経平均に多少先行しますが一致指標。同指標は、22年8月5日週-14.3%→8月12日週-10.0%→8月19日週+11.4%→8月26日週+7.1%→9月2日週-21.4%→9月9日週-30.0%→9月16日週-11.4%と、3週連続でマイナス圏に陥っていますが、再び、マイナス幅は縮小しています。いつも指摘していますが、過去、下落相場が終了するには、同指標の移動平均ベースが一旦、「-40%の下限ゾーン」に陥ることが条件です。同指標の移動平均は22年8月5日週-8.6%→8月12日週-7.1%→8月19日週-3.8%→8月26日週-1.2%→9月2日週-4.8%→9月9日週-9.5%→9月16日週-9.0%と、19週連続マイナス圏に陥ってます。ただ、不自然な「株価操縦」を繰り返すことで「-40%の下限ゾーン」を未だ実現せず、そのため「株価底入れ」が遠のいているのが現状です。以前から、『今年はショートカバー(売り方の買い戻し)で相場が急反発する「ブルトラップ(強気ワナ)」を繰り返していることも特徴』と指摘してきましたが、リーマン・ショックの「世紀の空売り」のモデルとなったマイケルバーリ氏も『2000年のITバブル崩壊でナスダックはピークから底値まで78%下落する過程で、+10%以上の反転上昇は16回、+20%以上は7回あった』と指摘しています。NYダウの「T2レーティング」がリバウンドを示唆するかのように7月1日週に一旦、「買い」転換しましたが、約2か月後の9月2日週に再び「売り」転換して、マイケルバーリ氏が云う「デットキャットバウンス」終了のサインが表れたかたちです。先週13日にNYダウが1200ドル超の急落で率・幅ともに今年最大の下げを記録したことはそれを証明したかたちです。

日経平均とT2レーティング比率



□発行元:塚澤.com 運営事務局

□ご意見・ご感想:info@tsukazawa.com

※免責事項※

「塚澤.com 今週の T2経済レポート」は、

株式会社ライブグラフィー(以下、当社)が提供するレポートです。

これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いかねます。

提供する全ての情報について、当社の許可なく転用・販売することを禁じます。